



Title	特集 協働主義!/Part 1 これが私の協働主義!
Author(s)	
Citation	Communication-Design. 2009, 2, p. 9-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8895">https://hdl.handle.net/11094/8895</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第 1 部  
特集

---

特  
集

きょうどう しゅぎ  
協働主義！

1. — すべての出来事は協働<sup>きょうどう</sup>であると考えよ。
2. — 協働<sup>きょうどう</sup>を交感と共-生産の歓びとして享受せよ。
3. — 協働<sup>きょうどう</sup>にしたがって私のかたちを発見しなおすこと。
4. — しくみのためではなく、協働のために協働<sup>きょうどう</sup>せよ。





# これが 私の きょうどう しゅぎ 協働主義!

特集  
Part.1

現場に身を投じ、協働を実現するCSCD教員たち。

「災害ボランティア」「交通まちづくり」に取り組む彼ら彼女らはこう語る…

私1

渥美公秀の場合  
あつみ ともひで

災害ボランティア

# 「ただ傍らに在る」 ことから始まる

心理学／グループダイナミクスを  
研究しながら、震災の現場に出かけています。  
災害NPOでの実践、被災者とのつながり、学生  
たちと行うボランティア、研究と現場のあいだを  
往還する「協働的实践」という考え方  
についてお話しします。



これが  
私の  
協働主義！  
きょうどう しゅぎ

**震災10年の後に** 僕は兵庫県西宮市で阪神淡路大震災を被災しました。それ以来、西宮と神戸で日本災害救援ボランティアネットワーク<sup>[1]</sup>という団体をやっています。今は僕が理事長をしており、減災カフェ<sup>[2]</sup>も協力いただいている京都大学防災研究所の矢守准教授なども理事の一人です。

この団体もかなり活動のモードが変わってきました。震災10年までは駆け足モードでした。10年経つとこの手の団体はいっぱいできてきます。災害救援といっても、毎日服を着てトレーニングしているのではなく、またボランティア活動といっても、炊き出しをするのでもない。さらに言えば、災害ボランティアセンター<sup>[3]</sup>を作る能力は持っていますが、それは作らない、と尝试してみたりします。いろんな災害が各地で起こるたびに出かけていきます。

四川大地震の被災地にも行きました。まあ、えらい地震でした。被災地では写真も撮れば、インタビューもします。各地でこの報告をするときには、とても情緒的だと言われるかもしれませんが、「みなさん想いを馳せてください」とお願いしています。想いを馳せたところで、中国の人は助かりませんけども、我々が行ってできることも知れています。それよりも、今日親を亡くした子どもたちはご飯を誰と食べたんだろうか、そう思うことで、身近なところの人を助ける気になってくれたらいいんじゃないかと。

## 四川大地震

**「想いを馳せてください」** 10年ほど前でしたら、中国にどうやって行くのか、誰が団長で行くのか、どうやって何をいくら持って行くのか、ということ

を一生懸命やったと思いますが、今はあまりしません。もちろん、テントを送りましたが、それはごく一部で、他にはタオルでパンダを折って届けるというようなこともしています。これまで神戸からいろんなものを次の被災地に送り届けてきました。日本から、パンダを届ける。手を拭くには邪魔になるようなものですが、折鶴と同じ発想ですね。想いを届ける。

[1] NPO法人 日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)

阪神淡路大震災に集まったボランティアによって発足した「西宮ボランティア」(1995年2月)を前身に、1996年1月に発足。災害時には国内外のボランティア団体、行政、企業に連携を呼びかけ、被災者救援、被災地の復興活動支援を行う。平常時には全国災害救援ネットワークの構築、防災や災害救援、災害に強いまちづくりに携わる人たちのための研修プログラム、子どものための防災ワークショップなどの企画・運営を行う。

[2] CSCDの減災カフェ

ゲストに防災の専門家や災害の経験者を迎え、最新の研究・活動の報告をもとに、非常時という視点から、日常生活に潜在している問題について話し合う、何気ない普段の行動が意外にも「減災」につながっていることを考えるための場。

※ CSCD主催として年に3回程度開催。他に大阪・上町台地などの地域にて開催されている。

## 「被災者はどこに行っただ？」

大震災の直後、小学校の避難所に行くと、先生方、教育委員会、それから西宮市役所や兵庫県庁の人など、いろんな人と出会って、みんな即興でその場で考えてボランティアセンターを作ってきたわけです。その後、災害ボランティアセンター<sup>[3]</sup>やネットワークを作って効率的に動こうよという声があがる反面、被災者がほったらかしの救援が多くなってきたと感じています。例えば、センターを作るとすると、誰がトップで誰がサブでということを決めた方がいいし、それに関するマニュアルの一つでも作ったほうがいいということになります。しかしそんなことを繰り返していると、実際に聞こえてきた声なんですが、このボランティアセンターに行って、被災者の方と一人も会わへんかったというボランティアがでてくる。会わなくてもいいやないか、組織でやるのだからそういう裏方もいいやないか、という意見もあるでしょう。ですが、そういう組織であれば、国が金を出して整備すべきであって、我々がボランティアとして、あるいはNPOとして一生懸命やることじゃないだろう、という気がします。素朴すぎるかもしれませんが、「被災者はどこ行っただ？」と言っていく必要があります。

新潟県刈羽村は2007年7月16日に被災しました<sup>[4]</sup>。ここへ行ったときも、ボランティアセンターつくるわけですね。そのためのマニュアルも提供できますが、ここで我々が実際にしたことは、地元の社会福祉協議会で被災者の話を聞くということでした。どんな話かという、自分は主婦で、家族みんなで避難所に入ってる。で、子どもがもう怖くて怖くて学校に一人で行けないという状態になっている。旦那さんは仕事に出て夜遅く避難所に帰るという生活が続いている。昼間出てきたら、ボランティアセンターをどうしろああしろ、という話が出てくる。ましてや県外から、もののわかったような人たちがやってくる。もう、いい加減にしてくれということですよ。でも助けに来てくれている人たち

## 効率的 ということへの 疑問

### [3] 災害ボランティアセンター

主に災害発生時のボランティア活動を効率よく推進するための組織。平常時においても常設されている組織がいくつかあり、この場合は、災害予防に関するボランティアの養成や市民向け防災教育訓練、防災啓蒙活動を行うボランティアの拠点の性格も有する。

### [4] 中越沖地震

新潟県中越沖地震は、2007年7月16日10時13分23秒に発生した新潟県上中越沖を震源とする地震。地震の規模を示すMは6.8。中越地方では2004年の新潟県中越地震以来のマグニチュード6以上および震度5弱以上を観測した地震となった。

にはそんなこと絶対言えず、言ってみれば泣き場所がないわけです。そこで僕らの仕事は、わざわざ大阪から行ってその人の話を聴ける場所を作ることになりました。「効率的」ということへの疑問を感じています。「ネットワーク」というと格好いいけど、そんなもんじゃない、分かり合える仲間たちだろうと、情緒的な言葉使いですけども、思います。

中越地震<sup>[5]</sup>も、関さん（P21参照）や学生たちとやっています。社会と大学が連携するためには、学者だけではまったく駄目で、学生さんがどう関わるかというのがものすごく大事だと思います。大学が何を捨てても守らなくてはいけないのは学生です。学生さんが中越に行ってくると手を挙げてくれたんで、彼らにグループを作って、自主的に活動してもらいました。もっと効率よくやったらいいのになと思うこともあるんですけども、あえてコントロールはしていません。（この活動費の一部などを、寄付をもらってさきほどのNPOから補助していました。）

## 足湯を通しての交感

足湯というものも、効率悪いです。学生さんがおじいちゃん一人に20分くらいかかって世間話するわけですから。世間話するためのダシとして、足をお湯につけてもらってるわけです。効率悪いけれども、ボランティアとして神戸で感じたことが、実は、もう一度ここに現れているのではないか。これはまさに接触ですよ。このときに、被災したあなたと被災していない私というものが交感すると考えています。

塩谷集落<sup>しおだに</sup>は小千谷市<sup>おぢや</sup>にあります。尾根の向こう側に行くと川口町、反対側に行くと、山古志村<sup>やまこし</sup>（現・長岡市）の集落があり、尾根文化が根付いている場所です。昔は二十村郷と言って山の尾根から広がったので文化は一緒。復興にあたって、二十村郷の盆踊りを復活させることになりました。各地で同じ唄があるんです。だから交流して盆踊りをしようと。太

### [5] 中越地震

新潟県中越地震は、2004年10月23日（土）17時56分に新潟県中越地方を震源として発生したM6.8、震源の深さ13kmの直下型の地震。ユーラシアプレートと北米プレート間で起こった逆断層地震。北魚沼郡川口町では兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）以来9年ぶりとなる最大震度の震度7を観測。

## 塩谷分校で話を聞き合う

鼓を並べ叩く、僕たちも踊る、それから稲刈り。僕もけっこううまくなりました。

そして我々ができることはないかと、「塩谷分校」というみんなて話を聞き合う場所を作りました。住民は何かを勉強するときは、町へ降りなければというのですが、そんなアホなことはない、豊かなものは山の上にあるはずである。「限界集落<sup>[6]</sup>」というけども、ここのほうがええもん持っているはずだ、だからここに学校を開いてしまおう、と。大学の先生も呼んできて、例えば、一回目は、雪のことをやっている上村先生<sup>[7]</sup>。よく来る先生で、あいつは酒飲んでるだけじゃないかと言われてますが、真面目に一回、雪をエネルギーに変える話をしてくれました。塩谷は闘牛の町ですから、二回目は闘牛を民俗学者として研究しておられる東大の菅先生<sup>[8]</sup>が来られました。（この人は自分で牛飼ってて、実際に勢子もやってます。）三回目は僕です。もちろん、謝礼は出ません。自分の交通費で登ってきてもらいます。日直と飲み会担当の「給食当番」だけ決めてます。よう来てくれる人たちが大学の先生らしいけど一体何してるんだとみんな思っているところで、話をしてもらおう。わかってもらえるかどうか、話すほうは結構プレッシャーです。

CSCDの教員になる条件として、学部教育、大学院の教育を絶対させてくれと言いました。学生さんと接する時間は、楽しいものです。私の講座の学生にだけでなく、災害現地のことをいろんな所で話して、「行きたいです」と言った学生はなんとかして連れて行きたい。もちろんまず安全管理面で気をつけるべきこと、保険に入れとか、向こうで絶対自分で車を運転するなどかは言いますし、お酒を飲めるかどうかなどは聞いておきます。その上で、帰ってきてレポートや考えたことを書かせます。でも本心では、将来を担う人、例えば会社に入ってリーダーになる学生たちが、山の生活をみておくことは、きっと意味があると信じています。

単位とか  
これを学んでほしいとか  
ではなく

### [6] 限界集落

過疎化などで人口の50%が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になった集落のこと。長野大学教授である大野晃が高知大学人文学部教授時代の1991年に最初に提唱した。

### [7] 長岡技術大学の上村靖司先生

上村靖司（かみむら やすじ）  
長岡技術科学大学 准教授  
専門：雪氷工学  
所属：工学研究科 機械系（機械情報・制御工学）雪氷工学研究室

### [8] 東大の菅豊先生

菅 豊（すが ゆたか）  
東京大学 教授  
専門：民俗学  
所属：東洋文化研究所・汎アジア研究部門

実際に、卒業して社会人になった学生が、この秋祭りに集落に帰ってきて、帰ってきてというか、会社休んで来て、交流を続けている姿をみて、ああよかったなと思いますし、マンション売る会社に行った子が、あそこでおじいちゃんおばあちゃんと話したんで、私高齢者によるマンション売れるんです、ということもある。それもあるけど、どこかで行き詰まることがあったとき、ちょっと自分の田舎みたいに感じてくれたらな、とロマンチックな考えもあって行ってもらっています。単位とか、これを学んでほしいとかいうのは、あんまり考えていません。

復興デザイン研究会<sup>[9]</sup>を主宰しています。これは日本災害復興学会に組み込まれていますが、はみ出てもいます。現場の人たちは学会に興味はないし学会の傘下に入っても意味がないので、「会友」というのを作りました。本音では、学会なんて作って、本当に被災者のためになることが出来たためしがない、という言い過ぎですが、それくらいの想いがあるわけです。学者は楽しいかもしれんけど、被災した人たちに何の意味があるのか、

## 被災した人たちに 何の意味があるのか

あるのか、学术论文は書けるかもしれないけど、何のために行ったんか、学术论文のデータを搾取するために行ったんじゃないのか、という疑問に素朴に答えたいわけです。だから、学会が傾き出したらそっちへ引っ張りなおす拠点を作っておいていつでも挽回できるようにしたい。でもはみ出し過ぎて孤立し「あいつアホや」と言われなために、研究会として動けるようにもしておきたい。つまりそういう同志の集まりを研究会として固めておきたい。ここはニューズレターを出してまます。こういうところに文章を書く。これは僕自身のいい訓練になってます。わかりやすい文章を書くのはすごく難しいなと感じています。

専門をお持ちの方が、自分の専門は何だっけなど問わなくなったときが一番力を持つと思うんです。お話して帰るだけで、力を与えるんじゃないくて、もらって帰れた時が、一番力が発揮できた時だと思ってるんですよね。だからまあ、僕も一応それなりに専門はあるんですけど、

自分の専門は何だっけな

### [9] 復興デザイン研究会

正式名「日本災害復興学会 復興デザイン研究会」。復興をデザイン（設計）する。(1) 復興への取り組みの経験と知見の集約 (2) 学問体系としての確立 (3) 世界への発信、の3つを事業の柱とし、これらの事業を通じて、地域のアイデンティティを再認識する「地域再生」、人間・社会が自然と折り合いをつけながら暮らす「自然共生」、災害を転機として創造的に地域をつくり人を育む「協創復興」の実現を目指す。ニューズレター「復興デザイン」発行。

それを使おうと思っているうちは、空振りだろうという気がします。まあ、今日も、飲んでるだけやんけと言われたら、そうやなあと力抜いて言えるようになった感じ、その時になんかわかりあえているような気がするんですよね。そのときに何かがかっちから伝わったのではなくて、むしろこっちがいろいろと教えてもらえたなと思えたら、実はその逆も成り立っていた

## 研究者と当事者の 協働的实践へ

と。ややこしく言ったら「互酬的」などかいろいろ言えると思うんですが…実感としての言葉で言えば、専門をお持ちの方がいらっしゃるときには、そういうふうにお話しています。

ただし、専門を忘れてしまうことではなく、大学に帰ったら専門を生かすことです。つまり、大学のなかで専門をかつちり生かしていただいて、それをメタ反省する。専門を一瞬失っていた現場の私と、専門家である私という二重の私を生きるわけですから、その運動ができるという意味では、大学でないと駄目だと思います。別に大学じゃなくても、病院でもいいんですけど、本職のほうを忘れてたら、ただの暇なおっさんになりますから。

災害ボランティア

# 夢を語ることから

渥美先生と関わっている塩谷では、最初は田植えや収穫祭というイベント中心でしたが、2008年は今後の復興を考えるワークショップをしようということになりました。こうした集落では、男女が一緒に出てくるのがめったにない。お父さんお母さんが同じテーブルを囲んで話をするということすら珍しく、それを実現するまでかなり準備が必要でした。いままで9回前後行われているんですが、1回目は「夢を語る会」で、「誇れるところ」「塩谷でしたいこと(今年)」「塩谷でしたいこと(5～10年後)」を考えました。話し合ったことをまとめていくなかで、いくつかテーマができました。若い人に最後は介護してほしいというような夢もありました。最終的に「豊かな生活」「楽しむ生活」「なんかやってみよう」「老後も住みやすく豊かな村に」という4つにまとめ、その後の回では、この4つの夢を具体化していています。じゃあ、何ができるんだろうかといったときに、例えば、棚田で稲作をもう一回やり直そう、と。とはいえ、みなさん専業ではないので、兼業のかた

ちでやっていこうとか、山菜をとってくることもできるんじゃないか、というような案を出しながら、農業部会や交流部会をつくり、計画を立ててやろうとしました。なかなかこれもうまく進まず、強力なリーダーシップがあったり、利害調整がうまくいったところは先に進み、そうじゃないところは、とどまっている状況です。

地縁的關係や独自の文化が残っている場所では、都市でのまちづくりワークショップとは異なる意味で、周到な準備が必要であることがわかってきました。この先の課題としては、復興のかたちが見えだした段階で、そこから先は外部のものは「去る」こと、縁を切らない形で疑問だけを残して次にバトンタッチすることが必要なのではないかと考えています。

渥美さんや学生とともに、  
災害ボランティアの現場に出かけ、  
調査研究と支援活動を行うとともに、  
社会学の観点からボランティアや  
市民活動の理論的研究を通して  
新しい公共性のあり方を  
考えます。

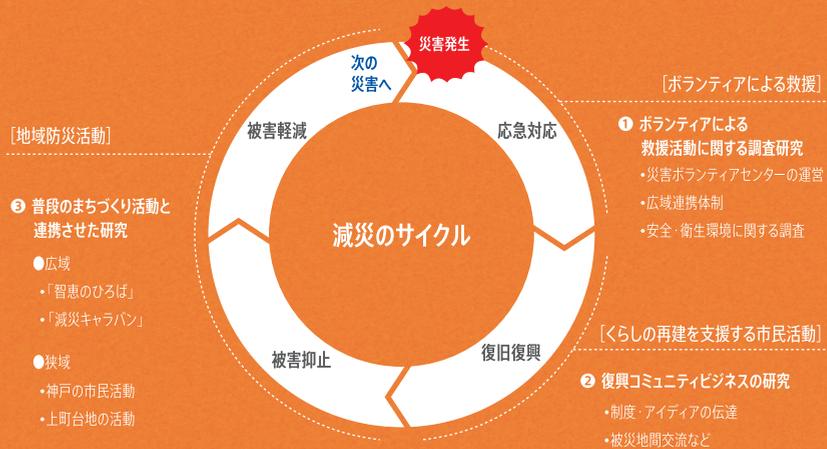


災害ボランティア

# ネットワークを超えて 智恵を分かち合う

専門は社会学。社会現象としての災害をとらえる調査研究、工学の人と一緒に問題の解決をめざす防災研究、そして、災害ボランティアの全国的なネットワークの中で、災害の経験を将来に伝えるブックレットをつくっています。





【図1】 災害対策サイクルと減災の調査研究

「減災」という考え方の背景には、米国の災害対策の理論 Disaster Management Cycleがある。これは、一連の災害対策を「応急対応」「復旧復興」「被害抑止」「被害軽減」という4つの段階に分け、ある段階の対策が、次の段階の対策にも影響を与え、相乗効果を上げながら、防災力を向上させていくという好循環モデルを示している。例えば家具の転倒防止など被害抑止対策が進めば、応急対応段階で、怪我をする筈の人が救援者になれる。重要なことは、対策同士の関係を見ながら、トータルで効果を上げていく対策を、考えていくことである。

## 「防災」から「減災」へ

渥美先生たちといっしょに、防災ではなく「減災」というキーワードで、災害に関わるコミュニケーションについて考えています。阪神・淡路大震災以降、防災に対する基本的な考え方が大きく変わってきました。震災以前は、被害を抑止するハードの予防対策が中心で、防ぎきれない被害は自治体や防災専門機関などの公的機関が一元的に対応する、という対策を基調にしていたのですが、震災によって、こうした予防対策偏重、行政依存体制の限界が明らかになり、「被害を完全に防ぐこと（Prevention）はできないので、ある程度の被害を容認した上で、できるだけそれらを減らしていこう（Reduction）」という「減災」の考え方が定着してきています。

こうした考え方に基づく対策は、必然的に多様な主体の関与を求めることとなります。特に、震災後に活躍した一般の市民の「共に助け合う」力に期待が寄せられ、「自助」の再評価・組織化と併せて、ボランティアや企業による支援が「共助」という概念で防災体制に位置づけられるようになりました。

その是非については慎重に議論しなければいけません。いずれにしても、多様な主体が様々な局面

で対策に関わることになれば、当然、人々の間のコミュニケーションが、課題としてより大きくクローズアップされることになります。

私がCSCDのコンセプトを意識して行っている研究・活動を【図1】のサイクルに位置づけてみると、① 応急対応に関しては、ボランティアによる救援活動の調査、② 復旧復興に関しては、コミュニティビジネスの研究、③ 被害を抑止する、あるいは普段のまちづくり活動と連携させた研究・活動となります。CSCDの社会学連携として意識的に取り組んでいるのは3番目です。

## 「いのちをまもる智恵」

阪神・淡路大震災の震災以降、各地に災害ボランティアのネットワークが結成されてきましたが、個々のネットワークを超えて災害の経験を共有し、将来に伝えていくための仕組みとして、2005年1月「智恵のひろば」が発足しました。この動きに合わせて、災害NPOのレスキューストックヤード（以下、RSY）<sup>[1]</sup>とCSCDの減災チームが連携し、RSYのスタッフが過去の被災地を歩き、減災につながりそうな智恵を30事例集め、それを

CSCDのデザイナーが絵本仕立てに編集して『いのちをまもる智恵』を出版しました。この絵本をひろく知ってもらいたい、さらに新たな智恵の発掘にもつなげていきたいと考え、絵本の内容を伝えていく取り組みも企画しました。2007年度は「地震EXPO<sup>[2]</sup>」や「サイエンスアゴラ<sup>[3]</sup>」など4箇所パネル展示を行いました。やはり双方向のコミュニケーションを通じて伝えていく必要性を感じ、2008年度は再びRSYと連携し、「減災キャラバン<sup>[4]</sup>」と題して、愛知県豊橋市、兵庫県豊岡市、そして大阪市の上町台地<sup>ウスまち</sup>境界線の3箇所、絵本のパネル展示と、シンポジウムやカフェなどのトークプログラムを開催してきました。

## まちづくりと減災ネットワーク

大阪・上町台地境界線とのお付き合いは、ちょうどこの『いのちをまもる智恵』を編集している時に始まりました。2007年秋に、「大阪ガス実験集合住宅NEXT21」にある上町台地コミュニケーション・ルームの壁面を使った展示プロジェクト（大阪ガスCEL主催、以下U-CoRo）の担当者から「次回“減災”をテーマにしたいが、アイデアは無いか」と聞かれたので「この絵本をパネルにして展示していただけたら…」と提案させていただきました【図2】。

上町台地は、上町断層帯の直上にあり、ここが揺れたら約4万2千人の死者が出るという被害想定が出されました。パネル展示期間中に関連イベントとして行った「減災カフェ」には、上町台地境界線のまちづくりネットワーク組織である「上町台地からまちを考える会<sup>[5]</sup>」の主要メンバーが集まったのですが、この場で、こうした上町の衝撃的な事実を共有して

きました。このカフェを機に、上町台地境界線でまちづくりに取り組む人達の意識が「減災」というキーワードに向けられるようになり、それぞれの活動の中で、減災を意識した取り組みが行われていきました。

例えば寺社仏閣の多い下寺町境界（大阪市天王寺区）では、「三帰会」という若いお坊さんの組織が中心になり、<sup>おつてんいん</sup>應典院<sup>[6]</sup>で勉強会を行ったり、仏教系のNGOと連携して、この境界のお寺で避難所運営やパケツリレーを行うというユニークなイベントも行われました。路地と長屋が多い<sup>からぼり</sup>空堀地区【図3】では、長屋再生に取り組む「<sup>からぼり</sup>俱樂部<sup>[7]</sup>」が、災害に弱い構造をもつ路地と木造建築のまちで、どう減災に取り組めるかを考えていく「<sup>ろじもく</sup>ロジモク減災<sup>[8]</sup>」という勉強会を立上げ、上町台地の地域履歴を学びながら、人のつながりを作っていき試みを始めています。U-CoRoプロジェクトでは、上町台地上の5つの地区で「<sup>ぼうがい</sup>防災クロスロード<sup>[9]</sup>」を行い、そこで出てきた参加者の声と各会場の写真を元に、2回目の減災展示が作られました。

さらに、ここでできたつながりを活かし、この上町台地境界線とCSCD、RSYが連携して、2009年1月から3月にかけて「減災キャラバン on 上町台地」を行いました。地域・大学・NPOと組織的にも異なる団体同士の連携は予想以上に難しく、トラブル続きでしたが、最後のトークプログラムでは、地域の人達の中から「減災、大切やで、続けていかな」という声も出て来るようになり、次のステージに進める土台はできたように思います。

大学で減災の研究をしている我々は、NPOや地域の人達に対して、防災に関する知識・人材ネットワークを紹介する一方、地域の人達からは研究と実践のためのフィールドを提供してもらっています。具



【図2】大阪ガス実験集合住宅NEXT21で行われた減災展の様子



【図3】空堀にあるお屋敷再生複合施設「練」

体的には、展示会場を提供してくれたオーナーや、このイベントに関わってくれた人達に集ってもらい、『いのちをまもる智恵』の読後感を聴かせていただく調査を企画しています。作り手は、過去の経験を伝えるために、色々な工夫を凝らしてこの本を制作しましたが、果たしてその努力は読者に伝わっているのだろうか？ もしまく伝わっていないところがあれば、どう改善すれば良いのか——これを探るのが調査の目的です。こうして、災害NPOの事業と、上町台地界隈での減災に向けた地域活動の双方と連携・協働しながら、大学にいる私は、絵本という「減災ツール」の可能性と限界を検証してみたいと考えています。

#### [1] NPO法人 レスキューストックヤード (RSY)

名古屋市に拠点を置く災害NPO。災害発生後は、被災地の救援・復興支援にスタッフを派遣し、平常時は、各地からの依頼に応え、災害ボランティア活動や防災まちづくり、災害時要援護者支援に関する講座の企画・運営、講師派遣を行う。地元名古屋市でも、産官学民と連携・協働し、「減災のまちづくり」を推進。

#### [2] 地震EXPO

2007年4月6日から1ヶ月間開催された地震防災の博覧会。「未来は夢見るものではなく、そなえるものになった」をテーマに、「日本に生きる私たちが地震から目をそらさず、ひとりひとりの防災意識を育てる」ための様々な体験型プログラムが行われた。

#### [3] サイエンスアゴラ

“科学と社会をつなぐ” 広場 (アゴラ) となることを標榜し、サイエンスにまつわる様々な問題について、双方向のコミュニケーションを行うことを目的としたイベント (2006年開始、独立行政法人科学技術振興機構主催)。NPO・企業・公的機関・大学研究室などの団体やボランティア・研究者個人が、シンポジウムや展示などの企画を出展。

#### [4] 減災キャラバン

2007年に発行した『いのちをまもる智恵』をパネル展示とトークプログラムを通じて伝えていくプロジェクト (「キャラバン」の名称は、震災の瓦礫を全国各地で展示して回ったイベントに由来)。RSYが主催し、CSCDも共催として参画。最初の2箇所はつながりのある過去の被災地で実施したが、最終回は「これからの災害を待つ」上町台地界隈で開催。お寺・神社・長屋と4箇所の会場を巡回し、リレートークには地域の関係者・学生なども参加、最も中身の濃いキャラバンとなった。

#### [5] 「上町台地からまちを考える会」

寺社仏閣、路地と長屋など特徴的な地域資源が集積する大阪市の上町台地界隈で、まちづくり活動を行う多様な団体や研究者によるゆるやかなネットワーク。

#### [6] 應徳院

1614年に大阪市天王寺区に創建された大蓮寺の塔頭寺院。1997年に、一般的な仏事ではなく、かつてお寺が持っていた地域の教育文化の振興に関する活動に特化した、「気づき、学び、遊び」をコンセプトにした地域ネットワーク型寺院として再建された。

#### [7] からほり倶楽部 (空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト)

都心にありながら戦災や再開発の波をくぐり抜けてきた路地と長屋のまちながが残る大阪・空堀商店街界隈。都心居住の先人たちが築き上げてきた街並みと、積み重ねてきた暮らし、それらが育んできた生活文化・都市文化の継承と発展をめざす組織。

#### [8] ロジモク減災

からほり倶楽部を中心に、CSCDも協力して進めている路地と長屋のまちでの減災の試み。まずは人的ネットワークづくりと防災・減災に関する基本知識や最新情報の吸収・共有をめざし、専門家を招いた「ロジモク減災勉強会」、神戸長田など被災地への「聞き歩きツアー」など地域全体での取り組みに向けた足固めを始めている。

#### [9] 防災クロスロード (減災ツール)

災害対応力の向上を目指したカード形式のゲーム教材。参加者にはジレンマな状況が提示され、Yes / Noのカードで自分の判断を提示し、その判断の根拠を紹介しあって、様々な考え方があることを学びあう。参加者は、このゲームを通じて互いの意見の背後にある「暗黙の前提」のずれに気付き、そのずれをどう調整できるかを考えていくことにもなる (このゲームのように、災害に関わるコミュニケーションを媒介する道具を、減災チームでは「減災ツール」と呼んでいる)。



智の循環をめざして

協働的实践とは、  
研究者と当事者が協働し、  
目的に向かって現状の変革を  
志向し、対話の様式に配慮して  
言説を紡ぎだすこと

渥美公秀

をいう。協働的实践は、いわゆるフィールドワークやアクションリサーチのうち、変革への意志を積極的に含んだものである。一般に、フィールドワークは、現場に研究素材を求め、理論的な解釈を施していく研究手法である。また、アクション・リサーチは、研究の素材を現場に求め、研究の成果を現場に返す研究手法である。それに対し、協働的实践は、フィールドワークとアクション・リサーチに現場の変革への意図を明示的に組み込んだ活動である。協働的实践には、理論的考察と現場における活動が、相互に入り組み、不可分に絡み合っている。(※)

## 効率のよい運営？

2007年に発生した2つの地震災害の被災地では、やはり災害ボランティアセンターが開設され、それまでの救援活動のある人々を中心として効率の良い運営が成されようとしていた。ところが、ここに2つの契機が訪れた。まず第1に、災害ボランティアセンターで作業していたボランティアから、「被災者の顔を見なかった」という声が聞かれた。確かに、災害ボランティアセンターでは、効率的な運営がなされるようになってきていたが、そこで活動するボランティアが被災者と接していないことは、形式だけを優先してきた災害ボランティアセンターのあり方を象徴する出来事であった。第2の契機は、「救援に当たる地元の人々が、着々と進む救援活動に取り残される」という事態の発生である。救援に当たる地元の人々は、被災者でもある。実際、避難所から災害ボランティアセンターに廻いながら救援活動を展開していたりする。その対象となるのは、地元の知り合いの方々である。地元には地元なりのネットワークも存在する。そういう地元独特の文脈への配慮を欠いた効率優先の救援のあり方が、地元の人々を圧迫するのである。

——「災害ボランティアの14年」

しかし、ここで注目しておきたいのは、そうした表面的な拘束ではない。被災者や被災地のための善意に包まれた制度が、実は根本的に被災者を圧迫するという点である。それは、「誰が誰の生をどこまでコントロールするのか」という根源的な問題を不問に付す圧力である。この力を〈暴力〉と書いて、通常の暴力と区別しよう。

ここで問題としているのは、「誰が誰の生をどこまでコントロールできるのか」という問いに無頓着なまま、いかにも善意を装って制度という圧倒的な力を持ち込む密やかな〈暴力〉である。実は、人を生かそうとする〈暴力〉は現代社会にあふれている。脳死、安楽死という生の終わりの場面。生命技術という生の始まりの場面。介護という生を支える場面。しかし、どの場面でも、いったい誰が誰の生をどこまでコントロールできるのかという問いにはなかなか答えられていない。

なお、ここでいう生は、生活や人生のことであると考えたとわかりやすいと思うが、実は、そうではなく、むしろ生命に近いと考えたい。生活なら制度も役立つだろうし、人生なら宗教も必要であろう。しかし、ここでいう〈暴力〉が密やかに暴力なのは、結局、生命をも捉えようとする点である。個人の生命だとわかりにくいなら、被災したコミュニティの生命と置き換えてみるとわかりやすいかもしれない。究極のところでは出会う課題である。つまり、いのちの問題である。

では、災害ボランティアは何をすべきだろうか。思い切って言えば、**災害ボランティアは、こうした〈暴力〉と闘うことである。**被災者を支援するということは、こうした〈暴力〉に晒される人々とともに〈暴力〉に敏感に反応し闘うことである。

具体的にはどうすればよいのだろうか。ここでは、災害ボランティアは、被災された方々の「ただ傍にいる」ことから始まるという点を改めて提示したい。第3章で述べた

## 寄り添うこと

中越沖地震を契機に立ち上がった寄り添いプロジェクトは、被災者はもとより、被災地で救援活動に参加することになっている地元の被災者でもある人々の傍にいて、その人たちが発する声にひたすら耳を傾ける活動である。ともすれば、効率や機能を優先し、一人ひとりの被災者の深い感嘆や戸惑いに対応しづらくなる災害ボランティアセンターに対し、災害ボランティアセンターと連動しつつも、独自に被災者や被災しながら救援活動に参加する現地の人々の傍にあって、長くかつ深い関係を築きながら、被災者本意の活動を展開しようとする試みである。

——「災害ボランティアについてもう一度考える」

## 情緒的であること

災害に遭うと、人は悲しい。この単純なことが、見過ごされてきたのではないだろうか。悲しみに包まれる被災地という表現は何も誇張でも、文学的な比喩でもない。身内の遺体を前にして泣き崩れる人々、全壊した自宅の前で呆然と立ちすくむ人々、そんな姿が被災地のあちらこちらに見られる。そもそも、感情には動物が環境に適應するための機能があるという説がある。動物である人間が、災害という場面に遭遇して、感情を表出することは、状況に適應しようとする自然な反応である。被災地を訪れた災害ボランティアも感情の奔流にのまれて当然である。

——「災害ボランティアという思想」

ように、足湯は、身体接触によって、被災者との一体感を生み出し、新しい関係を紡ぎ出す。寄り添うことは、被災者を忘れない救援活動にとって基本的な姿勢である。したがって、〈暴力〉に抗うには、被災者に限りなく近く、皮膚感覚を刺激するほど傍にすることで、被災者の語りに耳を傾け、被災者の息づかいを感じ取り、被災者の一体感と新しい関係を紡ぎ出すことである。もちろん、被災者と物理的に接近するだけではなく、心理的に傍にしているということも含めて考えておきたい。

ただし、1つのローカルな関係から何かを主張するのではないことに注意したい。また、様々な関係から半んだことを代表的な意見に集約するのでもない点は注記しておきたい。それでは、結局、制度に絡め取られるからである。そうではなく、災害ボランティアと特定の被災者との個々の関係をそれぞれに差異化させ続けるだけである。言い換えれば、**たった1つの関係をいくつもいくつも作っていくこと**である。そして、その1つ1つにおいて、「誰が誰の生をコントロールするのか」という問いをいのちの問題として共に考えていくことである。そこには、言葉にならないもっと情動的な次元や身体的な次元が表に出てくるだろう。

——「災害ボランティアという思想」

## 協働的実践のプロセスの8段階

- ① 理論的な検討をもとに、いわゆる“現場を見る目”を養う。
- ② 現場に行く。現場に行くのは、問いの発見、共通言語の発見のためである。
- ③ 現場から得られたことを整理する。
- ④ 理論的に考察する。
- ⑤ 理論的考察を変換し、現場に向かって発信する。その際、比喩や新しいフレーズなど多様にデザインする。
- ⑥ 現場が変化する。もちろん現場が変化するかどうかは協働的実践のあり方に依存する。また、変化の時期は様々である。
- ⑦ 変化した現場をもとに理論を精緻化していく。
- ⑧ 研究成果を研究者のみならず、現場の当事者、さらには、一般の人々に向けて表現する。そして①に戻る。

ただし、そもそも協働的実践を始める時には、出来事や現場に対する素朴とも言える観察がある。具体的には、災害現場を見て被災者に思いを馳せる場合、その時点では、周到な理論的検討があるというよりは、素直な驚きや共感がある。この段階を第0段階として成立させた上で、上記の8つの段階が展開すると考えたい。(※)

## つぶやきを聴く

災害ボランティアが被災者の方々と直接出会うということについては、能登半島地震以来、積極的に行われている足湯が展望を拓いてくれるだろう。足湯は、足が心地よいというだけではない。むしろ、足湯を通じて被災者の体と心にそっと触れ、会話をすることから、被災された方々のつぶやきを聴くことができるという点に特徴がある。被災者の話は、その土地のこと、被災前の暮らしのことなど多岐にわたる。実は、このことが、被災者のニーズに気づき、被災地の長期的な復興のヒントになる。そして、何より被災者に直接接しているのだから、「助けつつ助けられている」という関係に入りやすい。

——「災害ボランティアの14年」



[出典]

『災害ボランティア論入門』  
菅磨志保・山下祐介・渥美公秀＝編  
弘文堂／2008年

※印は『Communication+Design 2006』より

交通まちづくり

# まちを育てる、 コミュニティー エージェンシーを育てる

民俗学と都市研究を出発点にした  
「実践フィールドワーク」をしながら住民協働を  
プロデュースしています。交通を活かしたまちづくり現場、  
限界集落からオールドニュータウン、シャッター通り  
商店街から、クルマが押し寄せて困っている観光地…  
交通のコミュニケーション課題を抱えている  
ところを歩いています。



これが  
私の  
きょうどう しゅぎ  
協働主義！

## フィールドワークを 社会学連携のまえに、

私はもともと民俗学から出発し、都市のあり方を研究していました。そして阪神大震災を経験し、まちづくりに取り組むことになりました。

現在大学では教育・研究・社会連携（社会学連携）と分けられています。が、実態はみんな一緒になっているはず。そもそも、社と学の連携と協働のためには、市民公開講座とか近隣と仲良くすることだけでなく、もう少し大学が連携する意義を活かして、市民参加による課題解決の参画を模索しても良いと思います。でも、全国的に市民参画協働事業に関わっている立場から言えば、世の中そう甘くない。本当に大阪でそうした社会学連携と協働をするなら、大阪市がどういう政策をもって市民と結びついて何をしようとしているのかを把握しなければなりません。無計画に大学から「こんなんあります」とやったところで、とんちんかんです。地域に生きる大学として社会的責任を感じ、教育・研究・社会連携を一体としてすすめるには、日常の教育・研究活動でも地域に根ざした活動を意識的に展開する必要がある。

その意味で、総長が指摘される「大学の責任、USR<sup>[1]</sup>を果たすために“実践的なフィールドワーク”が重要」は卓見だと思います。参与観察者として社会のなかにフィールドをもつという研究ではなく、大学の関わりとして参画し、協働し、一緒にやっていく。そこに教育も入っていき、研究成果もそこから得るのだというのが私の姿勢です。「フィールドワーク」という言葉と実践が重要です。社会学連携のまえにまずフィールドワークをどうするかを考えたほうがいいですね。研究のためのフィールドワークではなく、社会的責任、教育、研究、社会連携を混ぜたUSRのフィールドワークを考えなければいけない。

## 交通とまちの コミュニケーション

さて、私にとっての課題は、コミュニティのコミュニケーション<sup>[2]</sup>です。しかし現実には、通常の都市の、現場のコミュニケーションは、よもやま話とコミュニケーションレスの対立の間をうろうろしています。これをど

[1] USR : University Social Responsibility  
大学の社会的責任。USRの取り組み内容は大学により様々だが、情報公開・法令順守・説明責任・危機管理などがあげられる。

[2] ブログ「森栗茂一のコミュニティ・コミュニケーション」  
<http://morikuri.cocolog-nifty.com/blog/>

まちづくり、  
バスでくるくる、

うやってコーディネートするのか、プロデュース、コントロールするのか。それがおそらく、社会学連携の大きな課題、プロデューサーとしての教員の役割ではないでしょうか。私は、研究・教育は、多かれ少なかれ社会に対する政策に関わったほうが楽しいと 생각합니다。学生もそうでしょうね。広義の政策とは二つあり、一つは、地域で人々が自分たちの地域を自分たちでつくるローカル・ガバナンス、もう一つは、みんなの意見を受けて、自治体が施策・条例を作る、国で法制化するという政策です。どちらも重要ですが、地場のできごと、問題解決と結びつけて、より有機的な政策を提示することが我々の役目だと考えます。

私はコミュニティのコミュニケーションを「まちコミュニケーション」という教科目名として表現しています。そのアプローチと期待される成果が、どのように位置づけられるのかをお話します。

いま、まちづくりへの参画、さらには、市民が自分たちでエリアマネジメントをする、エリアエージェンシーを作る、ということが世の趨勢です。例えば、バスがないところにバスを走らせてみようという住民みんなで話し合い、NPOが入り、バスを走らせる社会実験をしました【表:事例1】。車ばかりの町でしたが走らせたなら多くの人が乗った。やっぱり、やってみるとわからん、関わってみるとわからん。こうしたサービスの創造という、社会学連携のステージがあります。ここに私は関わりました。これは市民参加のアプローチです。社会学連携のためには、自分はどんなステージで何をするかを明確にすることが必要です。

次なるステージは何でしょうか。「東灘交通市民会議<sup>[3]</sup>」をつくって、実際に本格的にバス（「住吉台くるくるバス<sup>[4]</sup>」）を走らせます【表:事例2】。

【表】住民協働のステージ

事例	住民協働の活動諸ステージ	住民協働のアプローチ諸ステージ
1. くるくるバス実証実験 (C-NPO)	サービスの創造	市民参加
2. 東灘交通市民会議～くるくるバスを守る会 (特)神戸まちづくり研究所	政策決定への参画	ステークホルダー議論
3. 山口市市民交通計画		シェアホルダーによる運営
4. 三宮駅円滑化と(株)神戸まちづくり	出資・経営	エージェンシーの経営

路線（4条バス）を本格運行させるには、みんなで議論して、政策を作らねばなりません。実際に路線バスを開通させても、それをみんなで維持する活動をしなければいけない。これはローカルガバナンスです。ここに政策決定の参画という、社会学連携のステージがあります。このためにはみんなで議論をすること、例えば、住民、区役所の人、国の人、バス事業者など利害関係の異なる人たちのプラットフォームでの議論が不可欠です。

そのやり方が評価され、山口市から招かれ、「山口市市民交通計画<sup>[5]</sup>」をまとめました〔表：事例3〕。もちろん、10箇所の現場に、何度も足を運び、公民館で、畑の隅で、支所でお話を伺い、地域がみんなの思いをまとめるお手伝いをしました。これも政策決定への参画です。それぞれの地域の移動は、自分たちで作ってください、自分たちが主体的につくってください、自分たちがやらないところは行政もしませんよ、自分たちでやろうってところは行政もサポートします、森栗も行きますよという計画です。人口が少ない地方でバスを走らせるのは難しい。いくら役所の予算をつけても、続けることができません。でも、もう少しコストのかからないようなコミュニティタクシーならば、やり方を行政はサポートします、ただし自分たちで維持してください、自分たちで経営してください、どうしても赤字にならなかつたら、半分くらいは役所が補助します、というわけです。自分たちで主体的にやるのが重要です。この手法は、法制化されて、国の政策になり、今、全国を回っています。

## 公共交通は みんなで金出して、 支えなアカン！

先ほどの政策決定の東灘交通市民会議と山口市の計画はどこが違うのでしょうか。東灘交通市民会議はみんなで議論はしていますが、運行や運営はバス会社が行っている。ところが山口では、自分たちで経営するエージェンシーなんです。このアプローチの仕方を、エージェンシー

### [3] 東灘交通市民会議

2004年6月に発足。神戸市東灘区山麓部の自治会、管理組合、老人クラブ、ふれあいのまちづくり協議会代表者、協力者、NPOなどから、毎回50名程度が参加した。また学識経験者が座長を務め、会議のとりまとめ、解説、方向示唆を行った。

### [4] 住吉台くるくるバス

JR住吉駅（神戸市東灘区、JR神戸線）から住吉台地区のエクセル東までの間を走る路線バス。高台にある住吉台地区は神戸市東灘区の北西に位置し、昭和40年代に開発された住宅地で、近年高齢化が進んでいるが、公共交通機関が近隣になく、不便な状態に置かれていた。「東灘交通市民会議」の取り組みの結果、通常の民間路線バスとして運行を2005年1月より開始した。

### [5] 山口市市民交通計画

「市民だれもが移動しやすいまちづくり」に向けて、山口市における望ましい交通のあり方を明らかにし、それを実現するための効果的で効率的な方策を示すもの。平成19年9月策定。

的機能、シェアホルダー・プラットフォームといいます。自分たちで運営するから、最初走らせるときにみんなで金出そうということです。例えば、淡路島で過疎の村、100戸の長沢という村（あわじ市）がある。「どうすんねん？ バスなくなっちゃった！」そこで自分たちで、1世帯1万円ずつ出し、一年間で100万円集め、自分たちだけが乗るバスをつくる。こういうエージェンシー的な機能でやるのが重要です。そこに関わるフィールドワークもある。

こうした公共交通は、社会的共通資本です。不採算であっても、誰が経営するのか難しくても、みんなで支えないかん。病院も学校・大学も、道も公共交通のターミナルなんかも、みんなで支えなアカン。しかし、実態は、それぞれの鉄道会社、バス会社がそれぞれのサービスをしてる。でも、お客さんみんなにとって便利なターミナルを作るためには、情報提供を共通化しなければならない（社会的共通資本としての総合交通情報）。これはなかなか難しい。例えば、情報共有のためのポータルサイトを作るとする。ではそのポータルサイトを誰がどのように運営するのか。これもコミュニティから会社をつくるしかないんですね。コミュニティ・エージェンシーを作らなアカンんですね。つまり地域の社会的共通資本を自ら出資し、経営する。エージェンシー的な経営が求められていく[表:事例4]。社学連携は、大学発社会企業・大学発NPOの展開に行き着くでしょう。

## 学生と行く、

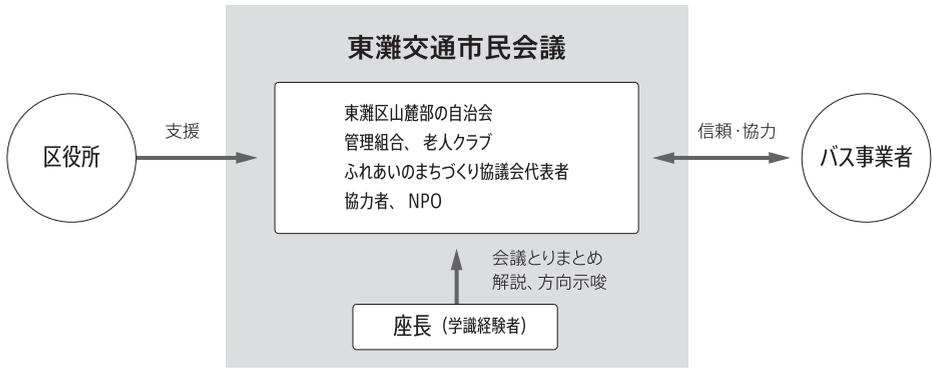
## まちづくりのフィールドワーク

以上は教育とも連携しています。

CSCD科目「交通まちコミュニケーション」のほか、「交流ツーリズム

実践論」（お遍路）、「交流ツーリズム」（大阪市）そして、土木計画などの工学のまちづくりにも関係しています。なぜ科目名が「まちコミュニケーション」なのか。「まちづくり」は「ハコものづくり」の発想になりがちです。そうではなくて、その関係性をつくっていくということで、「まち育て」とか、「待ちづくり」。こういう考え方で、まちのコミュニケーションと教科名をつけています。

これからは、こういう市民力によってまちづくりをすることが重要になってきます。「住吉台くるくるバス」は、こういう形になっています[図]。住民の組織があり、区役所などいろんなところが支援しています。こっちはバス事業者があり、利害関係が入り組んだなかでの議論をしていたわ



〔図〕住吉台くるくるバス

けです。「住民主体」というのを「住民だけでできる」と勘違いしてはいけません。考え方としては、まずは市民合意で、いろんな人たちが共同で議論する。市民合意をするためには情報公開が重要ですね。大阪市ではこの情報公開を進めていきます（わがまち会議における多面的協働）。いろんな人たちが、現場で議論する。それぞれ立場が違いますから、現場でこんなふうにできるやん、ああできるやんと、議論する。その上で、できることを協働する。これは大事で楽しい。先日、議論の現場にコーディネーター（森栗）・ファシリテーター（学生）として行って、いろんな人たちと議論をした。現場で議論し、さらに現地をフィールドワークする。学生たちをそこに立ち合わせるといろんな発見ができる。経験的知識が得られる。どんな方向に進むのか、専門家としてのビジョンを描くことがプロデューサーとしての重要な資質です。そのビジョンを、住民のお話を聞きながら一緒に練り上げていく、方向性をまとめあげていく。これが住民協働型の手法です。

住民協働の方法として、PDCA法 (plan-do-check-act cycle) <sup>[6]</sup>が援用されますが、PDCAは、一定の目的のために何かをするだけです。実は地域づくりにおいて一番重要なことは、「こんなまちやったらええなあ」というドリームです。ドリームをみんなで議論する。そして、だいたいこんな方向やったら

手法より大切なのは、  
まちのドリーム

〔6〕PDCA法

典型的なマネジメントサイクルの1つで、計画 (plan)、実行 (do)、評価 (check)、改善 (act) のプロセスを順に実施する方法。

いけるぞ、というビジョン<sup>[7]</sup>を考える。さらに、情報公開<sup>[8]</sup>して現場で議論をする<sup>[9]</sup>プラットフォームをつくる。D+V+PDCA、それにI（インフォメーション）、A（オープンアクセス）。現場では、大きな声で無理矢理説得すとか、数値で抑え込むのではなくて、誠実に議論していくなかで「そういう方向だね」という納得をどうつくるのが課題です。説得は意味をもちません。その上で、プロデューサーは、仕掛けた物語が動き出したら去る。流れ者は去るということ、撤退の流儀も重要なのです。

こうしたコーディネーター力。専門のことができるだけでなく、現場に対応して、その専門を生かしながらいろんなことができる人間が、現場では求められる。自治体の財政危機のときに、経営の人が出てきて、これを減らせ、切れ、と一方的に指示するだけでは、財政を改善できても、まちをよくすることはできません。こんなふうにしたらいい、こんなことができる、とみんなで議論する。そして、どうしたら効率的にできるか、そのため財政をどうするかを、市民の議論のなかで練り上げていかなければなりません。夢を上手に作る、夢を現実的なプログラムにする、そのための戦略をちゃんと組み込む、そういうことが重要です。

## 協働は 技術と智慧の 曼荼羅である

こういう都市のコミュニケーションの考え方として、真言密教：大日如来の世界が参考になる。密教では両界曼荼羅でその世界観を示しています。両界曼荼羅には金剛界と胎蔵界があります。金剛界とは技術の世界

### [7] ビジョン

ビジョンとは、市民がどのような交通を創りたいか、という想いである。その想いにそって、地域に最もふさわしい交通システムを地域住民、NPOや地域民間事業者（病院・商業・集客施設）と共に作り上げ、地域全体で支えていく仕組みづくりを深めていく。

### [8] 情報公開

情報公開は、そのための市民合意に欠かせない。バス路線の新設は要望・陳情だけでは実現は難しい。交通事業者も巻き込んだ市民会議を通じて実現が可能になる。特にバス停の共用については、現況では事業者間の調整は不可能に近いが、市民合意を尊重し合意可能となった。

### [9] 現場で議論

また、現場で議論しながら、社会実験によって成長した市民とそのリーダー、それを支える学識経験者、交通事業者、企業、NPO、関係行政機関がスクラムを組み目標実現に取り組むことで信頼関係が構築され、多面的協働につながり、路線実現の実績をあげることになる。

です。胎蔵界とは簡単にいうと、暮らしです。金剛界というのは知恵と技術で成り立っている。論理で事実を説得していく。こうだというふうに思い込んでいく。研究を貫徹するためには、我儘をとおすというのは重要なことです。例えば交通システムの技術を使ったり、都市計画のハードを使ったり、土木計画をたてたり、計算したり、それが重要です。一方で、胎蔵界というのがある。胎蔵界とは智慧です。「ちえ」の字が違います。心理に働きかけるような共感、慈悲で同情を誘発し、思いやる。「納得」を誘発することが「社会工学における態度変容」として重要です。例えば、車に頼らない社会をつくるというようなモビリティ・マネージメントというのは、難しい。「やっぱり車便利やし」となる。それをどうやって変えてもらうかという、現場で一緒に共感するようなありかた、そういうようなアンケートのとりかた、コミュニケーションの練り上げをする。これが協働のまちづくりで大変重要なことになるのです。

社学連携とは何か。例えば、土木計画は正義の実践である、土木計画そのものが、きちっと現場から立ち上がっていけばよいのだから、社学連携の理念を議論している暇はない、何やってんの？ というご意見もあると思います。コミュニケーション技術や語学などは、留学したり現場で実践したりしている間に、必要にせまられて身につくのではないかと、いう意見もある。僕としては、知識知と同等に実践知が重要だと思います。土木計画でも、無理な需要予測や、ビジョンを見失う、コミュニケーションレスで方向を見失うことが多々あります。ですから、工学の専攻の実践をやってれば社学連携は充分、CSCDの教育は必要ない、とは言えないでしょうね。専門を超えるメンバーで、社学協働のフィールドワークをもっと実践する必要がある。そういう多様な学生による実践知が重要です。そういう意味で、USRをどう組み立てていくのかというのは大学として重要なことですし、CSCDの社学連携の取り組むべきミッションだと考えています。今後は、理念や技量にとどまることなく、現場実践で鍛えられる経験知が重要なのではないかと考えています。





9/1(2008/9/1)  
 (8:00)  
 1430 - 15時 説明 自由参加  
 1440 - 15時 稲刈り体験  
 1445 - 15時 水田のつくりかた  
 (自由参加)  
 1555 - 30分 稲刈り  
 1610 閉会

2008/08/20

理論にもとづいた検証よりも素直な驚きや共感から始まり、現場でのつぶさな観察から理論を見直し、その考察の結果を現場に応じたことばで語り直す。専門家が現場に知識を注入するのではなく、言葉の交換を通じた現場での相互の変化がこそが、ここで協働を成り立たせている。

中継・KIBO 足湯はきらら  
 ナビゲーターの  
 一歩一歩  
 足湯の  
 写真展示...

このたんぼは  
 でん  
 といはす

2008/07/

なかま  
 あそび

2008/07/25  
 足湯・稲刈り  
 1440 - 15時  
 稲刈り体験  
 1445 - 15時  
 水田のつくりかた  
 (自由参加)  
 1555 - 30分  
 稲刈り  
 1610 閉会